

## 2 哺乳類

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

蘚苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

### 1. 三重県の哺乳類相

三重県に生息する陸産哺乳類については、「三重県レッドリスト（2015年版）」策定時点では在来種として44種の記録があった（三重県農林水産部みどり共生推進課 2015）。その内訳は、トガリネズミ形目8種、翼手（コウモリ）目13種、霊長（サル）目1種、食肉（ネコ）目8種、偶蹄（ウシ）目3種、齧歯（ネズミ）目10種および兔形（ウサギ）目1種であり、中央アルプス以北の山岳地帯に分布するオコジョや森林内での捕獲調査が進んでいないコウモリ類の一部等を除き、本州に分布するほとんどの種の生息が確認されている。これらには、国内ですでに絶滅したとされるオオカミとカワウソ\*も含まれる。

2015年以降も県内の哺乳類相に関する調査が少しずつ進められ、2021年に標本調査によりクロホオヒゲコウモリが新たに三重県産哺乳類リストに加わった。

また、外来種については8種の生息が確認されている。家ネズミ類（クマネズミ、ドブネズミおよびハツカネズミ）が県内に広く分布するほか、シベリアイタチとヌートリアが生息する。前者は県南部を除く地域の平野部に、後者は主として北勢地方と伊賀地方の河川周辺に生息する。また、2000年以降に初めて県内で確認されたアライグマとハクビシンも分布を広げており、農作物被害も顕在化している。さらに、鈴鹿山系御池岳周辺にはシマリスが生息している。

一方、海産哺乳類のうち鯨目については、伊勢湾に定住する唯一の種であるスナメリのほか、伊勢湾および熊野灘沿岸海域において24種の記録がある。食肉目のアシカ科、アザラシ科およびセイウチ科については、絶滅種ニホンアシカがかつて本県にも生息していた記録があるほか、迷行してきたと思われる5種も記録されている。

### 2. 調査の概要

今回のレッドリスト改訂にともない、評価対象としたのは下記の25種である。

- ・三重県レッドリスト（2015年版）に掲載された種：シントウトガリネズミ、カワネズミ、ヒメヒミズ、コキクガシラコウモリ、ヒメホオヒゲコウモリ、ノレンコウモリ、ヤマコウモリ、ヒナコウモリ、ニホンウサギコウモリ、ユビナガコウモリ、テングコウモリ、コテングコウモリ、オヒキコウモリ、ツキノワグマ、オオカミ、カワウソ、ニホンリス、ニホンモモンガ、ヤチネズミ、ヤマネ、ニホンカモシカ、ニホンアシカ、スナメリ（23種）
- ・三重県での生息が新たに確認された種：クロホオヒゲコウモリ
- ・近年、個体数の減少傾向が顕著な種：スミスネズミ

調査については、2022年に組織された三重県レッドデータブック改訂委員会哺乳・爬虫・両生類専門部会の委員が、「三重県レッドリスト（2015年版）」以降に公表された哺乳類に関する文献を収集し、評価対象種に関する情報を整理した。また、各委員がそれぞれ専門とする分類群の生息地に出向き、現地調査を実施した。

しかしながら、個体群サイズや分布域、あるいはその動態についてある程度の評価ができたのは、絶滅種3種を除き、ヒメヒミズ、コキクガシラコウモリ、ユビナガコウモリ、ヤチネズミ、スミスネズミ、ツキノワグマおよびニホンカモシカのみであり、ほとんどの種については「三重県レッドリスト（2015年版）」策定時と同様に、主として出現範囲、生息地点数、生息地の分断傾向、人為圧力等をもとに評価せざるを得なかった。

なお、和名および学名については、原則として Ohdachi et al. (2015) に従ったが、目および科の和名称については川田ほか (2018) に準じた。

### 3. 絶滅危惧種の概要

今回、新たにレッドリストに掲載された種はクロホオヒゲコウモリとスミスネズミである。前者は2006年に紀北町で捕獲され、ヒメホオヒゲコウモリとされた個体が本種の誤同定であったことが判明したものである。現時点で1個体のみ確認であることから、情報不足（DD）とした。後者はニホンジカによる林床植生の食害の影響を強く受けて、生息域が急速に減少していることから絶滅危惧II類（VU）とした。

一方、リストから除外された種は、コキクガシラコウモリとユビナガコウモリである。両種とも県内に広く分布し、新たに複数の大規模生息地が見つかったことから、低懸念（LC）と評価した。

今回の改訂でランクを上げたのは、ヒメヒミズである。本種もスミスネズミと同様、ニホンジカによる食害や森林伐採の影響を受け、生息地が減少しているため、絶滅危惧IB類（EN）とした。他方、ニホンモモン

哺乳類  
鳥類  
爬虫類  
両生類  
汽水・淡水魚類  
昆虫類  
クモ類  
貝類  
甲殻類  
その他動物  
維管束植物  
蘚苔類  
藻類  
キノコ  
EX  
EW  
CR  
EN  
VU  
NT  
DD

ガとツキノワグマについては、主として出現範囲が拡大したことにより、そのランクをそれぞれ準絶滅危惧(NT)と絶滅危惧II類に下げた。前出のヒメホオヒゲコウモリについては、誤同定にともなう生息確認地点が1カ所のみとなったため、評価を情報不足に改めた。

本県において絶滅が危惧される種にとって、最大の脅威が森林伐採や大規模な開発行為等にもなう生息環境の改変であることはいまでもないが、ここではさらに3つの要因を指摘しておきたい。まずは、1990年代以降に急増したニホンジカの食害による森林生態系の破壊である。その影響は本県でも依然、深刻な状態が続いており、シントウトガリネズミ、ヒメヒミズ、スミスネズミ、ヤチネズミおよびニホンカモシカでは個体数減少の重大な要因と考えられる。

次に、外来種については、絶滅危惧種への直接的な影響を確認することはできなかったが、アライグマやハクビシンは洞穴や樹洞に住み着くことがあり、ヤマネ、ニホンモモンガ、ニホンリスおよびコウモリ類への影響が懸念される。

さらに、県内で稼働する風力発電施設では鳥類だけでなく、コウモリ類への影響(バット・ストライク)も危惧され、その影響を把握することが課題である。

\*長崎県対馬で2017年に朝鮮半島由来と考えられる複数の個体が確認され、現在も生息する可能性がある。

### 主な参考文献

- 井元俊介. 2022. 三重県大台町におけるコキクガシラコウモリ *Rhinolophus cornutus* の出産哺育集団の記録. 三重県総合博物館研究紀要, (8): 23–25.
- 川田伸一郎・岩佐真宏・福井大・新宅勇太・天野雅男・下稲葉さやか・樽創・姉崎智子・横畑泰志. 2018. 世界哺乳類標準和名目録. 哺乳類科学, 58 (別冊): 1–53.
- 北村淳一 (編). 2022. 生まれ! 三重のクジラとイルカたち. 三重県総合博物館, 津, 111pp.
- 三重県. 1996. 三重県史 別編自然. 三重県, 津, 748 pp.
- 三重県教育委員会・奈良県教育委員会・和歌山県教育委員会 (編). 2018. 紀伊山地カモシカ保護地域第5回特別調査報告書 平成28・29年度. 三重県教育委員会・奈良県教育委員会・和歌山県教育委員会, 津・奈良・和歌山, 279 pp.
- 三重県農林水産部みどり共生推進課 (編). 2015. 三重県レッドデータブック2015 ～三重県の絶滅のおそれのある野生生物～. 三重県農林水産部みどり共生推進課, 津, 757 pp.
- Ohdahi, S.D., Ishibashi, Y., Iwasa, M.A., Fukui, D. and Saitoh, T. 2015. The Wild Mammals of Japan Second Edition. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto, 506 pp.
- 清水善吉・佐野明. 2021. 三重県におけるクロヒメホオヒゲコウモリの記録 —清水(2007)でヒメホオヒゲコウモリとされた個体の再検討—. 三重自然誌, (17): 72–73.
- 清水善吉・富田靖男・上田利彦. 2018. 三重県の哺乳類・爬虫類・両生類. みえ生物誌—哺乳・爬虫・両生類, 鳥類. pp.1–102. 三重自然誌の会, 松阪.
- 自然環境研究センター. 2019. 平成30年度(2018年度)中大型哺乳類分布調査報告書 クマ類(ヒグマ・ツキノワグマ)・カモシカ. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田, 113pp.
- 自然環境研究センター. 2023. 鈴鹿山地カモシカ保護地域第6回特別調査中間報告書. 自然環境研究センター, 東京, 52 pp.
- 富田靖男. 1979. 三重県の哺乳動物相. 三重県立博物館研究報告 自然科学, (1): 5–68.
- 富田靖男. 2000. 三重県の陸産哺乳類(II). 三重県環境保全事業団研究報告, (6): 23–47.
- 若林郁夫・塚田修・久保田正. 1998. 駿河湾, 遠州灘及び熊野灘で記録された北方性海産哺乳類. 東海大学海洋研究所報告, (19): 105–112.

(佐野 明)

## 除外種

「三重県レッドデータブック 2015」掲載種のうち、今回の改訂により低懸念（LC）と判定された種とその理由は以下のとおりである。

### 新レッドリストで低懸念（LC）となった種

目名	科名	和名	学名	三重県		環境省	判定理由
				新	旧		
翼手目	キクガシラ コウモリ科	コキクガシラ コウモリ	<i>Rhinolophus cornutus</i> Temminck, 1834	LC	NT	—	近年の調査で生息確認地点 が増加傾向にある。
翼手目	ユビナガ コウモリ科	ユビナガ コウモリ	<i>Miniopterus fuliginosus</i> (Hodgson, 1835)	LC	NT	—	近年の調査で生息確認地点 が増加傾向にある。

## 哺乳類レッドリスト

目名	科名	和名	学名	三重県		環境省	掲載頁
				新	旧		
食肉目	イヌ科	オオカミ	<i>Canis lupus</i> Linnaeus, 1758	EX	EX	EX	36
食肉目	イタチ科	カウオン	<i>Lutra lutra</i> (Linnaeus, 1758)	EX	EX	EX	36
食肉目	アシカ科	ニホンアシカ	<i>Zalophus japonicus</i> (Peter, 1866)	EX	EX	CR	36
トガリネズミ形目	トガリネズミ科	シントウ トガリネズミ	<i>Sorex shinto</i> Thomas, 1905	CR	CR	—	37
トガリネズミ形目	モグラ科	ヒメヒミズ	<i>Dymecodon pilirostris</i> True, 1886	EN	VU	—	37
翼手目	オヒキコウモリ科	オヒキコウモリ	<i>Tadarida insignis</i> (Blyth, 1862)	EN	EN	VU	37
トガリネズミ形目	トガリネズミ科	カワネズミ	<i>Chimarrogale platycephalus</i> (Temminck, 1842)	VU	VU	—	38
翼手目	ヒナコウモリ科	ニホンウサギ コウモリ	<i>Plecotus sacrimontis</i> G. M. Allen, 1908	VU	VU	LP	38
翼手目	ヒナコウモリ科	ノレンコウモリ	<i>Myotis bombinus</i> Thomas, 1906	VU	VU	VU	38
齧歯目	キヌゲネズミ科	ヤチネズミ	<i>Eothenomys andersoni</i> (Thomas, 1905)	VU	VU	—	39
齧歯目	キヌゲネズミ科	スミスネズミ	<i>Eothenomys smithii</i> (Thomas, 1905)	VU	—	—	39
偶蹄目	ウシ科	ニホンカモシカ	<i>Capricornis crispus</i> (Temminck, 1836)	VU	VU	LP	39
鯨目	ネズミイルカ科	スナメリ	<i>Neophocaena asiaorientalis</i> (Pilleri & Gühr, 1972)	VU	VU	—	40
食肉目	クマ科	ツキノワグマ	<i>Ursus thibetanus</i> G. Cuvirr, 1823	VU	EN	LP	40
翼手目	ヒナコウモリ科	テングコウモリ	<i>Murina hilgendorfi</i> (Peters, 1880)	NT	NT	—	40
齧歯目	ヤマネ科	ヤマネ	<i>Glirulus japonicus</i> (Schinz, 1845)	NT	NT	—	41
齧歯目	リス科	ニホンリス	<i>Sciurus lis</i> Temminck, 1844	NT	NT	—	41
齧歯目	リス科	ニホンモモンガ	<i>Pteromys momonga</i> Temminck, 1844	NT	VU	—	41
翼手目	ヒナコウモリ科	ヤマコウモリ	<i>Nyctalus aviator</i> Thomas, 1911	DD	DD	VU	42
翼手目	ヒナコウモリ科	ヒナコウモリ	<i>Vespertilio sinensis</i> (Peters, 1880)	DD	DD	—	42
翼手目	ヒナコウモリ科	コテング コウモリ	<i>Murina ussuriensis</i> Ognev, 1913	DD	DD	—	42
翼手目	ヒナコウモリ科	ヒメホオヒゲ コウモリ	<i>Myotis ikonnikovi</i> Ognev, 1912	DD	EN	LP	42
翼手目	ヒナコウモリ科	クロホオヒゲ コウモリ	<i>Myotis pruinosus</i> Yoshiyuki, 1971	DD	—	VU	42

哺乳類  
鳥類  
爬虫類  
両生類  
汽水・淡水魚類  
昆虫類  
クモ類  
貝類  
甲殻類  
その他動物  
維管束植物  
蘚苔類  
藻類  
キノコ  
EX  
EW  
CR  
EN  
VU  
NT  
DD

哺乳類  
鳥類  
爬虫類  
両生類  
汽水・淡水魚類  
昆虫類  
クモ類  
貝類  
甲殻類  
その他動物  
維管束植物  
蘚苔類  
藻類  
キノコ  
EX  
EW  
CR  
EN  
VU  
NT  
DD

**オオカミ** 食肉目 イヌ科  
*Canis lupus* Linnaeus, 1758

【選定理由】亜種ニホンオオカミ *C.I.hodophilax* は1905年1月に奈良県吉野郡東吉野村小川においてM.P.Andersonにより収得された若い雄を最後にその後の記録がなく、絶滅したものと推定される。

【種概要】大陸産より小型で、頭胴長100 cm内外、尾長30 cm内外。

【分布】種はユーラシア大陸および北アメリカ北中部に分布。本亜種は本州、四国、九州に、別亜種エゾオオカミ *C. l. hattai* は北海道に分布していた。

【現況・減少要因】県内には標本などデータを伴う資料は見あたらない。古文書としては、内務省博物館（現東京国立博物館）の田代安定が動植物調査のため専門家5人で紀州を一周した時の「明治十年紀州紀行」に、1877年6月6日に現北牟婁郡紀北町海山区矢口浦の山中で撲殺されたオオカミ1頭を本館で展示する目的で収集したとの記述が認められるが、その個体のその後の所在は不明である。減少要因としては捕殺、餌動物の減少、ジステンパーの流行、あるいはこれらの複合作用など諸説がある。

【文献】1, 3, 20, 47. (富田靖男)

三重県 2025
EX
三重県 2015
EX
環境省 2020
EX

**カワウソ** 食肉目 イタチ科  
*Lutra lutra* (Linnaeus, 1758)

【選定基準】日本では高知県須崎市における1979年の記録の後、確実な記録はない。また、三重県では狩猟統計による1924年の捕獲情報以降正式な記録がない。

【種概要】河川中流から河口部や沿岸に生息する水生肉食性哺乳類。頭胴長65 cm内外、尾長45 cm内外で、尾は先端に向かって次第に細くなる。四肢の指の間には水かきが発達。

【分布】ユーラシア大陸と北アフリカに広く分布。国内では北海道から九州の一部に分布していた。

【現況・減少要因】1900年代に入ってから全国的に減少が加速し、1928年に狩猟獣から除外されたが、それ以前数年の農林省の狩猟統計によると、三重県では1923年3頭、1924年13頭で、1925年以降の記録はない。県内各地の郷土教育資料などによると、1920年代頃までは県内にも若干生息していたものと推定されるが、絶滅の年代は明らかでない。減少要因としては毛皮目的の過度な捕獲、生息環境の変化などが想定される。

【特記事項】2017年に長崎県対馬の複数箇所において成体が複数回確認（撮影）されているが、韓国南部からの漂着とされている。

【文献】3, 7, 19, 20, 48, 49. (富田靖男)

三重県 2025
EX
三重県 2015
EX
環境省 2020
EX

**ニホンアシカ** 食肉目 アシカ科  
*Zalophus japonicus* (Peters, 1866)

【選定理由】日本沿岸にはかつては生息・繁殖地が点在していたが、1974年の北海道礼文島での幼獣捕獲、1975年の島根県竹島での目撃報告以降記録がない。三重県では100年以上記録がない。

【種概要】体長雄240 cm内外、雌180 cm内外で、雄は暗褐色。雌は灰褐色。

【分布】千島列島、サハリン南部から、国内では北海道、本州、四国、九州などの周辺海域に分布していた。

【現況・減少要因】三重県には捕獲個体など、データを伴う資料は見当たらない。しかしながら1800年代後半の古文書、大日本水産会が北牟婁郡（現尾鷲市）の会員との間で交わしている「大日本水産会報告」の質疑応答欄には、櫻井平八の「海獣諸件」（同報告74,1888年）および土井幹夫の「海驢の件質問」（同報告82,1889年）の2件の海獣類（記述の特徴はアシカと合致）に関する報告が認められる。これらの記述によると、「当北牟婁郡の如き冬季屢近海に来たり岸礁上に上がりて遊ぶを見る。然るに此一兩年は絶えて来ることなし」と述べていることから、尾鷲地域には少なくとも1880年代頃までは生息していたものと推察される。過度の捕殺等により消滅した。

【文献】3, 4, 9, 10, 11, 20, 23. (富田靖男)

三重県 2025
EX
三重県 2015
EX
環境省 2020
CR

**シントウトガリネズミ**  
*Sorex shinto* Thomas, 1905

トガリネズミ形目 トガリネズミ科

【選定理由】大台ヶ原1地点でのみ生息が記録されているが、1984年を最後に確認がない。

【種概要】頭胴長51~60 mm, 尾長47~50 mm, 体重4.1~8.5 g. 林床の落葉や蘚苔類の中、モグラ類の坑道などを利用して活動し、ミミズや昆虫を採餌している。

【分布】本州の紀伊半島と京都府以北の山地、佐渡島、四国の山地に分布する日本固有種。県内では、大台町（大台ヶ原の正木嶺）で記録がある。

【現況・減少要因】大台ヶ原では、奈良県側も含めて40年近く生息情報がない。寒冷期の遺存種とされており、高山山岳地帯のない本県においては、もともと分布域は限定されていた。唯一の生息地である大台ヶ原では、ニホンジカの食害等により針葉樹が枯死し、本種の生息環境である樹林内の落葉・蘚苔類層が消失してササ原化した。

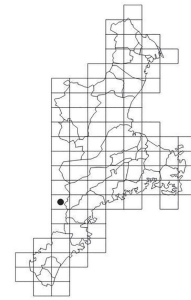
【保護対策】環境省の自然再生推進計画（第2期）に基づいて、ニホンジカの捕獲や観光客の利用調整等が行われているが、森林再生には長年月を要する。何よりも生息確認調査が急務であり、生息が確認された地域については、森林再生後の拡散に備えて厳重に管理する必要がある。

【特記事項】生息地一帯は吉野熊野国立公園特別保護地区。

【文献】14, 32, 40.

(清水善吉)

(写真：奈良県, 2015年)



三重県 2025	CR
三重県 2015	CR
環境省 2020	—

**ヒメヒミズ**

トガリネズミ形目 モグラ科

*Dymecodon pilirostris* True, 1886

【選定理由】生息確認地点数は10以下。出現範囲は狭く局所分布、生息環境が限定的かつ悪化傾向にあり、近年の確認がないためVUからENに変更。

【種概要】頭胴長64~86 mm, 尾長33~40 mm, 体重7.5~13.4 gの小型のモグラ。林床の落葉や蘚苔類、腐植土層に浅いトンネルを掘って行動し、ミミズや昆虫を採食する。

【分布】本州、四国、九州に分布する日本固有種。本州中部山岳地帯では亜高山帯以上に生息するが、北にいくほど生息地は低くなり、東北では平地にも生息する。県内では、松阪市、大台町、大紀町で記録がある。

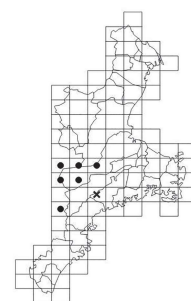
【現況・減少要因】ヒミズとの競合によりもともと局地的にしか生息しない。その生息地が森林伐採や林道工事により改変され、全体的に減少傾向にある。また、ニホンジカの食害により下層植生の消失が進行しており、餌条件の悪化等の影響を及ぼしている。松阪市の生息地はレッドリスト改訂のための調査では確認できず、大紀町の生息地は林道工事により消滅した可能性が高い。

【保護対策】林道工事や治山・砂防ダムの建設にあたっては計画前の生息確認調査を実施し、その結果を反映させたルートや位置の選定を行うべきである。

【文献】32, 33, 37, 40.

(清水善吉)

(写真：和歌山県, 2025年)



三重県 2025	EN
三重県 2015	VU
環境省 2020	—

**オヒキコウモリ**

翼手目 オヒキコウモリ科

*Tadarida insignis* (Blyth, 1862)

【選定理由】現在、生息が確認されている場所は県内に1カ所しかない。その面積は著しく狭く、生息基盤が脆弱である。

【種概要】前腕長57~67 mm, 頭胴長84~94 mm, 尾長48~56 mm. 尾膜から尾が突出している。耳介は大きく丸みを帯びて前方に張り出している。

【分布】国内では北海道、本州、四国、九州の各地で単独個体が記録されているが、静岡県、三重県、京都府、高知県、宮崎県および鹿児島県の無人島の岩の割れ目、校舎や鉄道高架橋の隙間等で集団が見つかる。県内では、1970年代にいなべ市で単独個体が捕獲された記録があるが、集団が確認されているのは紀北町沖合の無人島のみである。

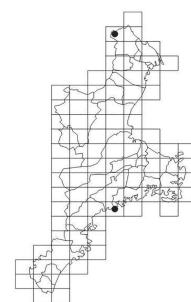
【現況・減少要因】県内唯一の生息地は国内でも数少ない本種の集団生息地であるが、個体数の増減傾向も含め、生息実態は不明である。

【保護対策】生息地である無人島は法令によって開発が規制されており、今後も現状が維持される必要がある。

【文献】17, 26, 30.

(佐野 明)

(写真：紀北町, 2007年)



三重県 2025	EN
三重県 2015	EN
環境省 2020	VU

- 哺乳類
- 鳥類
- 爬虫類
- 両生類
- 汽水・淡水魚類
- 昆虫類
- クモ類
- 貝類
- 甲殻類
- その他動物
- 維管束植物
- 蘚苔類
- 藻類
- キノコ
- EX
- EW
- CR
- EN
- VU
- NT
- DD

哺乳類

### カワネズミ

トガリネズミ形目 トガリネズミ科

*Chimarrogale platycephalus* (Temminck, 1842)

【選定理由】2000年以降の生息確認地点数は10程度。出現範囲は広いが、生息環境は限定的かつ悪化している。

【種概要】頭胴長110~138 mm, 尾長92~102 mm, 体重40.0~59.7 g. 水中生活に適応した大型のトガリネズミ。河川の上・源流にすみ、昼夜活動し魚類や水生昆虫、サワガニ等を捕食する。

【分布】本州、九州に分布する日本固有種。県内では、いなべ市、菰野町、伊賀市、津市、松阪市、大台町、度会町、紀北町、熊野市から記録がある。

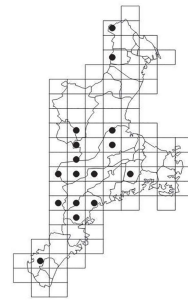
【現況・減少要因】菰野町三滝川は約90年前、松阪市堀坂川は40年前の記録であり、最近の報告はない。この2地点については、河川整備や道路工事により環境が大きく変容しており、生息の可能性は低いと思われる。

【保護対策】河川の工事にあたっては、水生昆虫等の死滅を招き餌資源に影響を及ぼす濁水流出防止は必須であり、また、多自然型工法の採用等により河川生物の多様性を確保する必要がある。伊賀市や津市の生息地は集落内の河川であり、山間溪流にのみ生息するわけではないことから、対策地域の選定にあたっては事前調査が不可欠である。

【文献】2, 32, 35, 40.

(清水善吉)

(写真：松阪市，2024年)



三重県 2025

VU

三重県 2015

VU

環境省 2020

—

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

蘚苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

### ニホンウサギコウモリ

翼手目 ヒナコウモリ科

*Plecotus sacrimontis* G.M. Allen, 1908

【選定理由】県内ではこれまで8カ所で記録があるが、確認された地域は県南部に限られ、個体数もきわめて少ない。

【種概要】長い耳が特徴。前腕長37~44 mm, 頭胴長42~63 mm, 尾長37~58 mm. ねぐらとして自然洞窟、廃坑、隧道のほか、家屋や樹洞も利用する。森林（主に落葉広葉樹林や針広混交林）に生息する。

【分布】日本固有種。北海道、本州、四国および九州から知られるが、西日本では比較的少ない。県内では大台町、紀北町、尾鷲市および熊野市の隧道や家屋で記録されているが、個体数は少ない。出産哺育場所は見つからない。

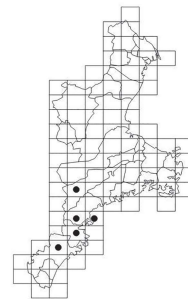
【現況・減少要因】県内の生息状況は不明である。しかし、主な生息地とされる落葉広葉樹林が伐採され、本種も影響を受けていると推測される。

【保護対策】県内における分布生息実態の把握が急務である。自然度の高い森林を広く残しつつ、定期的に利用する洞穴が発見された場合には、周辺環境とともに保全することが必要である。

【文献】17, 26, 28.

(佐野 明)

(写真：大台町，2020年，井元俊介撮影)



三重県 2025

VU

三重県 2015

VU

環境省 2020

LP

### ノレンコウモリ

翼手目 ヒナコウモリ科

*Myotis bombinus* Thomas, 1906

【選定理由】県内ではこれまで8カ所で記録があるが、確認された個体数はきわめて少ない。

【種概要】前腕長38~42 mm, 頭胴長44~52 mm, 尾長39~50 mm. 尾膜の後縁に細毛が列生する。耳珠は9 mm以上あって先端が尖る。主として洞穴をねぐらとするが、家屋や樹洞を利用することもある。

【分布】日本では北海道、本州、四国、九州、屋久島および口永良部島から記録がある。県内では、大台町、紀北町、尾鷲市および熊野市で生息が確認されている。

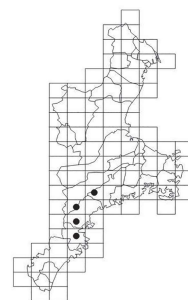
【現況・減少要因】これまでに見つかった8カ所のねぐらはいずれも県南部の隧道である。確認された個体数はきわめて少なく、5頭以上の集団は確認されていない。大台町と尾鷲市の隧道では越冬も確認されているが、出産哺育場所は見つからない。個体数の増減傾向も含め、生息実態は不明である。

【保護対策】県内における生息実態調査を早急に実施し、利用実績のある洞穴およびその周辺の環境を積極的に保全することが必要である。

【文献】17, 24, 26, 40.

(佐野 明)

(写真：大台町，2020年，井元俊介撮影)



三重県 2025

VU

三重県 2015

VU

環境省 2020

VU

## ヤチネズミ

齧歯目 キヌゲネズミ科

*Eothenomys andersoni* (Thomas, 1905)

【選定理由】生息確認地点数は10程度。出現範囲が狭く局所分布、生息環境は限定的かつ悪化傾向にある。

【種概要】頭胴長82~127 mm, 尾長47~70 mm, 体重16.0~48.0 gで、全体にずんぐりとした印象のネズミ。岩場、ガレ場等の隙間を利用して行動し、草食性でまれにスギの樹皮等を齧ることもある。

【分布】本州中部、北陸以北と紀伊半島南部に分布する日本固有種。本州中部では標高400 m前後から高山帯まで、東北や紀伊半島では平地にも生息する。県内では、松阪市、大台町、大紀町、尾鷲市、熊野市、御浜町、紀宝町で生息の記録がある。

【現況・減少要因】谷沿いの岩場・ガレ場に限定的に生息しているため、いずれの確認地点でも生息範囲は狭く、密度も低い。大紀町の生息地は林道工事等により消滅した可能性が高い。ニホンジカによる下層植生食害の影響も認められるが、シカの侵入しにくい岩場等を主な生息環境としているため、スミスネズミほど顕著ではない。

【保護対策】林道工事や治山・砂防ダムの建設にあたっては計画前の生息確認調査を実施し、その結果を反映させたルートや位置の選定を行うべきである。

【文献】32, 37, 40.

(清水善吉)

(写真：奈良県, 1986年)

## スミスネズミ

齧歯目 キヌゲネズミ科

*Eothenomys smithii* (Thomas, 1905)

【選定理由】生息確認地点数は比較的多いが、個体数は少なく、生息環境の悪化が顕著であり、最近の確認はない。

【種概要】頭胴長74~121 mm, 尾長33~50 mm, 体重12.3~38.2 gで、ずんぐりとした体形のネズミ。ブナ等の落葉広葉樹林を中心に生息し、草食性である。

【分布】本州、四国、九州に分布する日本固有種。県内では、いなべ市、菰野町、鈴鹿市、亀山市、伊賀市、津市、松阪市、多気町、大台町、度会町、大紀町、南伊勢町で生息の記録がある。

【現況・減少要因】ニホンジカによる食害の影響をもっとも強く受けており、レッドリスト改訂作業のなかで12地点の既知生息地の調査を実施したが、確認できなかった。いずれも地点でも、下層植生がほとんど失われており、草食の本種にとっては生息困難な環境となっている。

【保護対策】ニホンジカの個体数調整は生物多様性保全上の大きな課題であるが、まずは侵入できない環境を作り出すことも必要である。亀山市の野登山ブナ林(県指定天然記念物)は、ニホンジカの影響を受けない高木だけが残存している状況であるが、文化財保護の観点からも防鹿柵設置等の積極的な保全策を講じる必要がある。

【文献】32, 33, 37, 40.

(清水善吉)

(写真：東京都, 1982年)

## ニホンカモシカ

偶蹄目 ウシ科

*Capricornis crispus* (Temminck, 1836)

【選定理由】孤立した地域個体群である。鈴鹿山地、紀伊山地の個体群とも森林施業の変化やニホンジカの増加等ともなっており、生息密度が低下している。

【種概要】頭胴長70~85 cm, 肩高70~75 cm, 体重30~45 kg。雌雄とも永久的な角が一对ある。

【分布】日本固有種。鈴鹿山地の個体群はいなべ市から亀山市に、紀伊山地の個体群は津市から紀宝町に分布する。両個体群の間に位置し、かつては分布しないとされた布引山地での目撃例が近年、増加している。

【現況・減少要因】両個体群とも周辺部(低標高地)への分布の広がり認められるが、本来の生息地で個体数が激減している。林業不振に伴う新植造林地の減少やニホンジカとの競合が大きく関わり、獣害防止柵へのからまり、くくり罠による錯誤捕獲の影響もある。

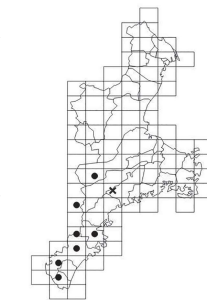
【保護対策】保護地域外も含めた広範な生息状況の把握、錯誤捕獲等人為的な死亡リスクの軽減、ニホンジカの個体数調整が必要である。

【特記事項】2020年、鈴鹿山地、紀伊山地のカモシカは、それぞれ環境省レッドリストで絶滅のおそれのある地域個体群に選定された。国指定特別天然記念物。

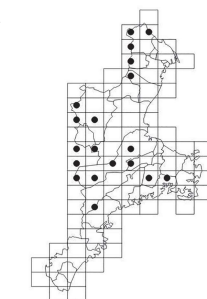
【文献】3, 6, 18, 27, 45.

(佐野 明)

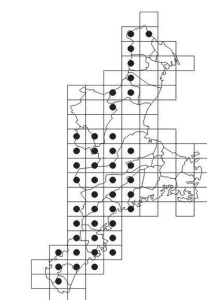
(写真：大台町, 2018年, 井元俊介撮影)



三重県 2025	VU
三重県 2015	VU
環境省 2020	—



三重県 2025	VU
三重県 2015	—
環境省 2020	—



三重県 2025	VU
三重県 2015	VU
環境省 2020	LP

- 哺乳類
- 鳥類
- 爬虫類
- 両生類
- 汽水・淡水魚類
- 昆虫類
- クモ類
- 貝類
- 甲殻類
- その他動物
- 維管束植物
- 蘚苔類
- 藻類
- キノコ
- EX
- EW
- CR
- EN
- VU
- NT
- DD

哺乳類  
鳥類  
爬虫類  
両生類  
汽水・淡水魚類  
昆虫類  
クモ類  
貝類  
甲殻類  
その他動物  
維管束植物  
蘚苔類  
藻類  
キノコ  
EX  
EW  
CR  
EN  
VU  
NT  
DD

## スナメリ

クジラ目 ネズミイルカ科

*Neophocaena asiaorientalis* (Pilleri & Gühr, 1972)

【選定理由】生息域は湾内の50 m以浅の人間の経済活動が活発な沿岸海域であり、環境汚染等の影響を受けやすく生息数の減少が懸念される。

【種概要】伊勢・三河湾およびその周辺の海域に生息する唯一の鯨類。体長170～200 cm、体重60～70 kg。出産期は2～7月で、希に秋の出産もある。妊娠期間は約11カ月、1産1子、出生体長と体重は75～85 cm、約8 kg。漂着・混獲個体の歯を用いた年齢査定では、野生下の最高年齢は雄で31歳が確認されている。新生児は母乳で育ち生後3～5カ月で餌を食べ始め、約1年は母乳と併食。餌は甲殻類、頭足類、小型魚類。

【分布】日本では仙台湾から東京湾、伊勢・三河湾、瀬戸内海から響灘、橘湾から有明海、大村湾の5系群が知られ、系群間の交流は殆どない。

【現況・減少要因】2014年の航空機調査で伊勢・三河湾の生息数は3,920頭と推定されたが、その後調査はなく現在の生息数は不明。2011年～2020年の死亡個体の漂着は伊勢湾西岸で年平均48.6頭が確認されている。

【保護対策】漁業の許可および取締り等に関する省令で捕獲と保持は禁止されている。イルカ避(よ)け音響ピンガー等を用いるなど、混獲防止が必要。

【文献】5, 12, 13, 15, 21, 22, 41, 42, 43, 50, 51, 52, 53, 54, 55.

(古田正美)

(写真：鳥羽市，2022年，鳥羽水族館提供)



三重県 2025

VU

三重県 2015

VU

環境省 2020

—

## ツキノワグマ

食肉目 クマ科

*Ursus thibetanus* G. Cuvier, 1823

【選定理由】1999年には紀伊半島3県で約180頭と推定されていたが、その後の保護対策の効果により回復傾向にあるためENからVUに変更。しかし、増加が人との軋轢を生む種であるため、将来についての楽観はできない。

【種概要】全長・体重(鈴鹿山地)140 cm・94 kg、同(紀伊山地)107～140 cm(平均122.9 cm, n=16)・38～84 kg(平均49.0 kg, n=17)で、紀伊山地産はやや小型。

【分布】本州、四国。県内では各山地から情報がある。

【現況・減少要因】狩猟獣であり、また、林業被害を発生させることから、捕獲・駆除が盛んに行われた結果、激減した。しかし、狩猟が1994年から禁止され、また、有害駆除も1996年を最後に行われていない。さらに、2004年に県指定希少野生動物種となり、錯誤捕獲個体についても原則的に奥山放獣で対応している。近年の分布域は拡大傾向で2001～2003年度に比べて176.7%に増加しており、鈴鹿山地での目撃情報の増加や紀伊半島個体群の北進傾向が認められる。2018年以降、錯誤捕獲は毎年発生し17件にあがっている。

【保護対策】個体数増加と山間集落の人口減少があいまって、人里への出没も頻発しており、保護一辺倒の施策を見直す時期に来ている。

【文献】8, 32, 38, 40, 44, 46.

(清水善吉)

(写真：大台町，2025年)



三重県 2025

VU

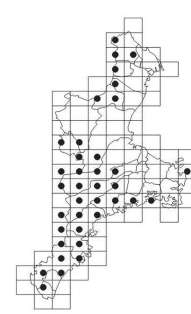
三重県 2015

EN

環境省 2020

LP

(紀伊半島個体群)



## テングコウモリ

翼手目 ヒナコウモリ科

*Murina hilgendorfi* (Peters, 1880)

【選定理由】県内に比較的広く分布するが、確認された個体数は少ない。

【種概要】前腕長39～47 mm、頭胴長46～70 mm、尾長32～47 mm。鼻の先端が左右に分かれて突出している。自然洞窟や廃坑、隧道、家屋、樹冠など多様な場所をねぐらとして利用する。主として森林内で採餌し、地表を徘徊する昆虫も捕食する。

【分布】日本では北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では、いなべ市から御浜町にかけて26カ所で確認されている。

【現況・減少要因】三重県ではほとんどが洞穴での確認であり、個体数は多くない。単独で発見されることが多く、5頭以上の集団は確認されていない。出産哺育場所も未確認である。個体数の増減傾向も含め、生息実態は不明である。

【保護対策】県内における生息分布実態の把握が急務である。自然度の高い森林を広く残しつつ、定期的に利用する洞穴が発見された場合には、周辺環境とともに保全することが必要である。

【文献】17, 26, 28.

(佐野 明)

(写真：多気町，2020年)



三重県 2025

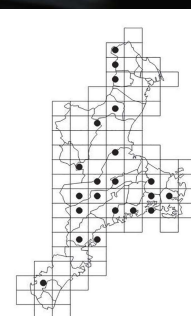
NT

三重県 2015

NT

環境省 2020

—



## ヤマネ

*Glirulus japonicus* (Schinz, 1845)

齧歯目 ヤマネ科

【選定理由】生息確認地点数は12, 森林に強く依存しており, 生息環境は悪化傾向。

【種概要】頭胴長70~88 mm, 尾長46~49 mm, 体重10.6~15.2 g, 夜行性で, 生活の大部分を樹上で過ごし, 樹洞内に樹皮を丸めて巣をつくる。液果や昆虫を食べる雑食。12~3月頃まで冬眠する。

【分布】本州, 四国, 九州, 隠岐島後に分布する日本固有種。低山帯から亜高山帯の森林に生息する。県内では, 津市, 松阪市, 大台町, 紀北町, 尾鷲市, 熊野市で生息の記録がある。

【現況・減少要因】鈴鹿山地からの生息記録は滋賀県側も含めてなく, 布引山地では個体は未確認であるが, 巣材の記録はある。青山高原や獅子ヶ岳一帯の風力発電施設, 南延する自動車道建設は大きな脅威と推定される。

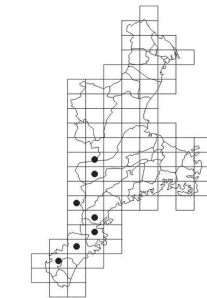
【保護対策】生息地を分断する道路等の建設にあたっては, 移動橋(ヤマネブリッジ)の設置等を行っているが, 有効性は疑問である。有効な対策の見当たらない現状では, 文化財である本種の生息が確認された時点で工事中止が法的には妥当であろうが, 現実的ではない。県内の生息状況を明らかにし, 実態に即した保護管理マニュアルを作成すべきである。

【特記事項】国指定天然記念物。

【文献】32, 34, 40。

(清水善吉)

(写真: 津市, 1996年)



三重県 2025

NT

三重県 2015

NT

環境省 2020

—

## ニホンリス

*Sciurus lis* Temminck, 1844

齧歯目 リス科

【選定理由】広葉樹二次林やアカマツ林を中心に, 山地や丘陵地には比較的広く分布しているが, 生息地の直接的な消滅により個体数が減少している。

【種概要】頭胴長160~220 mm, 尾長130~170 mm, 体重250~310 g. 背面は褐色系で腹部は白い。昼行性で, 芽・花や果実, 昆虫なども食べる雑食。

【分布】本州, 四国, 九州に分布する日本固有種。県内では北勢から東紀州にかけて広域的に分布している。

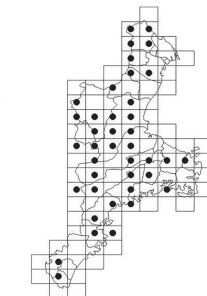
【現況・減少要因】既存資料等では広域的に記録されているが, マツ枯れの影響により主たる生息環境であったマツ林が激減した。また, 住宅・工業団地, スポーツ・レジャー施設, 道路建設などにより環境が改変された所多くみられる。最近では, 風力発電施設やメガソーラーの建設などが生息地を消滅させている。とくに後者は, 広域を面的に改変することから影響は大きい。

【保護対策】広葉樹二次林をはじめとする山林開発の抑止ならびに長期・総合的な視点にたった保全, 管理が必要である。隣接地に同等な環境があることをもって開発の免罪符にすべきではない。また, 放棄的な造林地の広葉樹林化など, 積極的な環境改変も検討する時期にきている。

【文献】32, 40。

(清水善吉)

(写真: 津市, 2024年, 佐野明撮影)



三重県 2025

NT

三重県 2015

NT

環境省 2020

—

## ニホンモモンガ

*Pteromys momonga* Temminck, 1844

齧歯目 リス科

【選定理由】生息確認地点数は10程度, 情報量は増加傾向にあるためVUからNTに変更。個体数は多くない。

【種概要】頭胴長183 mm, 尾長130 mm, 体重127 g, 目が大きく, 前肢と後肢の間に皮膜があり, 樹間を滑空しながら移動する。夜行性で, 葉・芽, 昆虫などを食べる雑食。

【分布】本州, 四国, 九州に分布する日本固有種。四国, 九州ではまれなようである。県内では菰野町, 亀山市, 津市, 松阪市, 大台町および熊野市で記録がある。鈴鹿・布引・高見・紀伊の脊梁山地に分布する。

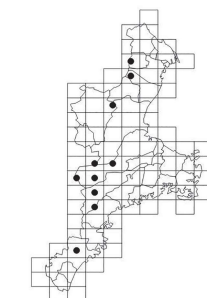
【現況・減少要因】レッドリスト改訂にともなう調査で, 新たに2地点での生息記録が追加された。それでも, 各山地で1~2例の記録であり, 分布状況を十分に把握できているとは言い難い。本種の移動様式は樹幹間の滑空を基本とすること, また, 巣穴の形成に十分な太さの樹木が必要なことから, 森林の伐採は本種にとって大きな脅威となっていると思われる。

【保護対策】森林施業に際しては森林間を結ぶグリーンベルトを残していく等の配慮も必要である。また, 本種の生活には樹洞が不可欠であるから, 大木の保存も重要である。同時に, 生息状況の把握が急務である。

【文献】16, 32, 36, 40。

(清水善吉)

(写真: 津市, 1998年)



三重県 2025

NT

三重県 2015

VU

環境省 2020

—

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

蘚苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

哺乳類	<b>ヤマコウモリ</b> <i>Nyctalus aviator</i> Thomas, 1911	翼手目 ヒナコウモリ科	三重県 2025 DD	三重県 2015 DD	環境省 2020 VU
鳥類	津市で樹洞に生息する集団が確認された例があるのみである。その木はすでに枯死し、伐採されている。 【文献】 25, 26.				
爬虫類	(佐野 明)				
両生類	<b>ヒナコウモリ</b> <i>Vespertilio sinensis</i> (Peters, 1880)	翼手目 ヒナコウモリ科	三重県 2025 DD	三重県 2015 DD	環境省 2020 —
汽水・淡水魚類	大台町と津市で各 1 頭、いなべ市で 2 頭が確認されているにすぎない。 【文献】 26, 29.				
昆虫類	(佐野 明)				
クモ類	<b>コテングコウモリ</b> <i>Murina ussuriensis</i> Ognev, 1913	翼手目 ヒナコウモリ科	三重県 2025 DD	三重県 2015 DD	環境省 2020 —
貝類	津市美杉町で1948年、1974年、1998年に各 1 頭が確認されているにすぎない。 【文献】 26.				
甲殻類	(佐野 明)				
その他動物	<b>ヒメホオヒゲコウモリ</b> <i>Myotis ikonnikovi</i> Ognev, 1912	翼手目 ヒナコウモリ科	三重県 2025 DD	三重県 2015 EN	環境省 2020 LP
維管束植物	県内では、大台町の森林で 1 頭確認されたのみである。 【文献】 31, 39.				
蘚苔類	(佐野 明)				
藻類	<b>クロホオヒゲコウモリ</b> <i>Myotis pruinus</i> Yoshiyuki, 1971	翼手目 ヒナコウモリ科	三重県 2025 DD	三重県 2015 —	環境省 2020 VU
キノコ	県内では、紀北町の隧道で 1 頭確認されたのみである。 【文献】 39.				
EX	(佐野 明)				
EW					
CR					
EN					
VU					
NT					
DD					

## 文 献

- 1 阿部永. 2000. 日本産哺乳類頭骨図説. 北海道大学図書刊行会, 札幌, 279pp.
- 2 阿部永. 2003. カワネズミの捕獲, 生息環境および活動. 哺乳類科学, 43: 51–65.
- 3 阿部永 (監). 2008. 日本の哺乳類 [改訂 2 版]. 東海大学出版会, 秦野, 206pp.
- 4 土井幹夫. 1889. 海驢の件質問. 大日本水産会報告82, 質疑応答1889. [三重県. 1996. 三重県史別編自然, pp.287–290]
- 5 Furuta, M., T. Kataoka, M. Sekido, K. Yamamoto, O. Tsukada and T. Yamahsita. 1989. Growth of finless porpoise *Neophocaena phocaenoides* (G. Cuvier, 1829) from the Ise Bay, Central Japan. Annual Report of Toba Aquarium, (1): 89–102.
- 6 橋本幸彦・森豊. 2018. 鈴鹿山地カモシカ保護地域におけるニホンカモシカの分布の変遷. 野生生物と社会, 5: 1–8.
- 7 Imaizumi, Y. and M. Yosiyuki. 1989. Taxonomic status of the Japanese otter (Carnivora, Mustelidae), with a description of a new species. Bulletin of the National Science Museum, Series A, 15(3): 177–188.
- 8 石井信夫. 2014. 紀伊半島のツキノワグマ. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進課 (編). レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—1 哺乳類, pp.116–117. ぎょうせい, 東京.
- 9 Isono, K. and K. Inoue. 2009. *Zalophus japonicus* (Peter, 1866). In S. D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh, eds., The Wild Mammals of Japan, pp.288–289. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.
- 10 伊藤徹魯. 1994. ニホンアシカの復元にむけて (7) 古文献の「アシカ」の同定. 海洋と生物, 16: 215–224.
- 11 伊藤徹魯・中村一恵. 1994. ニホンアシカの復元にむけて (9) ニホンアシカの分布と復元. 海洋と生物, 16: 373–393.
- 12 Jefferson, T. A. and J. Y. Wang. 2011. Revision of the taxonomy of finless porpoise (genus *Neophocaena*): The existence of two species. Journal of Marine Animals and Their Ecology, 4: 3–16.
- 13 神田育子・古山歩・若林郁夫・若井嘉人・船坂徳子・吉岡基. 2021. 伊勢湾西岸における2011～2020年のスナメリのストランディングに関する記録. 三重大学大学院生物資源学研究所紀要, (47): 13–23.
- 14 環境省近畿地方環境事務所. 2010. 大台ヶ原自然再生推進計画—第2期—. 環境省近畿地方環境事務所, 大阪, 86pp.
- 15 粕谷俊雄. 2011. イルカ—小型鯨類の保全生物学. 東京大学出版会, 東京, 640pp.
- 16 河瀬直幹・笠井誠吾・東正也・地村登. 2021. 鈴鹿山脈南部におけるニホンモモンガ2例の記録. 滋賀自然環境研究会誌, (19): 41–44.
- 17 コウモリの会 (編). 2023. 識別図鑑 日本のコウモリ. 文一総合出版, 東京, 239pp.
- 18 三重県教育委員会・奈良県教育委員会・和歌山県教育委員会編. 2018. 紀伊山地カモシカ保護地域第5回特別調査報告書 平成28・29年度. 三重県教育委員会・奈良県教育委員会・和歌山県教育委員会, 津・奈良・和歌山, 279pp.
- 19 Nakanishi, N. and M. Izawa. 2019. Rediscovery of otters on the Tsushima Islands, Japan by trail cameras. Mammal Study, 44: 215–220.
- 20 日本哺乳類学会 (編). 1997. レッドデータ 日本の哺乳類. 文一総合出版, 東京, 279pp.
- 21 西谷愛・船坂徳子・淀大我・吉岡基・古田正美・若林郁夫・長谷川修平・黒柳賢治・大池辰也. 2013. 伊勢湾・三河湾系スナメリの年齢と歯の組織変化. 平成25年度日本水産学会秋季大会講演要旨集: 81.
- 22 小川奈津子・吉田英可・中村玄・加藤秀弘. 2017. 伊勢湾・三河湾におけるスナメリの個体数と分布. 水産海洋研究, 81(1): 29–35.
- 23 櫻井平八. 1888. 海獣諸件. 大日本水産会報告74, 質疑応答1888. [三重県. 1996. 三重県史別編自然, pp.286–287]
- 24 佐野明. 2003. 三重県におけるノレンコウモリの初記録. 紀伊半島の野生動物, (7): 20.
- 25 佐野明. 2014. 三重県で初めて確認されたヤマコウモリとそのねぐら. 三重自然誌, (14): 29–30.
- 26 佐野明. 2016. 三重県におけるコウモリ類の分布記録. 三重県総合博物館研究紀要, (2): 9–29.
- 27 佐野明. 2017. カモシカ紀伊山地個体群の分布拡大を示唆する目撃記録3例. 紀伊半島の野生動物, (11): 13–15.
- 28 佐野明・井元俊介. 2021. 三重県におけるニホンウサギコウモリとテングコウモリの新たな分布記録.

## 哺乳類

## 鳥類

## 爬虫類

## 両生類

## 汽水・淡水魚類

## 昆虫類

## クモ類

## 貝類

## 甲殻類

## その他動物

## 維管束植物

## 蘚苔類

## 藻類

## キノコ

## EX

## EW

## CR

## EN

## VU

## NT

## DD

- 南紀生物, 63(1): 21–13.
- 29 佐野明・大西かおり. 2006. 三重県におけるヒナコウモリの初記録. 紀伊半島の野生動物, (89): 1–2.
- 30 佐野明・清水善吉・佐野順子・山本輝正. 2006. 紀伊半島からのオヒキコウモリ生息地の初記録. 紀伊半島の野生動物, (8): 3–5.
- 31 清水善吉. 2007. 三重県におけるヒメホオヒゲコウモリの初記録. 三重自然誌, (11): 127–128.
- 32 清水善吉. 2015. 熊野古道の獣. 三重県立熊野古道センター, 尾鷲, 87pp.
- 33 清水善吉. 2021. 和歌山県レッドデータブック2021追加記録—とくに, ヒメヒミズとスミスネズミの生息環境—. 南紀生物, 63(2): 159–163.
- 34 清水善吉. 2021. ヤマネを高野龍神スカイラインで目撃. 南紀生物, 63(2): 159–163.
- 35 清水善吉. 2023. 室生赤目青山国定公園および周辺地域で確認した哺乳類, 爬虫類, 両生類. 三重自然誌, (18): 43–46.
- 36 清水善吉. 2024. モモンガと巣箱とカメラ. 自然誌だより, (141): 6.
- 37 清水善吉. 2024. 減少する小型哺乳類—三重県におけるニホンジカの被害—. 南紀生物, 66(2): 98–103.
- 38 清水善吉. 2024. 三重県におけるツキノワグマの盛衰. 自然誌だより, (142): 2–4.
- 39 清水善吉・佐野明. 2021. 三重県におけるクロヒメホオヒゲコウモリの記録—清水(2007)でヒメホオヒゲコウモリとされた個体の再検討—. 三重自然誌, (17): 72–73.
- 40 清水善吉・富田靖男・上田利彦. 2018. 三重県の哺乳類・爬虫類・両生類. みえ生物誌—哺乳・爬虫・両生類, 鳥類, pp.1–102. 三重自然誌の会, 松阪.
- 41 白木原美紀・吉田英可. 2003. スナメリ. 月刊海洋, 35: 527–590.
- 42 Shirakihara, K., H. Yoshida, M. Shirakihara and A. Takemura. 1992. A questionnaire survey on the distribution of the finless porpoise, *Neophocaena phocaenoides*, in Japanese waters. Marine Mammal Science, 8: 160–164.
- 43 Shirakihara, M. and M. Yoshioka. 2015. *Neophocaena asiaorientalis* (Pilleri & Gihl, 1972). In: S. D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M. A. Iwasa, D. Fukui and T. Saitoh, eds.. The Wild Mammals of Japan Second Edition, pp.398–399. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.
- 44 自然環境研究センター. 2019. 平成30年度(2018年度)中大型哺乳類分布調査報告書 クマ類(ヒグマ・ツキノワグマ)・カモシカ. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田, 113pp.
- 45 自然環境研究センター. 2023. 鈴鹿山地カモシカ保護地域第6回特別調査中間報告書. 自然環境研究センター, 東京, 52pp.
- 46 高田敦史・若山学. 2021. 奈良県におけるカメラトラップを用いたツキノワグマの個体数推定. 奈良県森林技術センター研究報告, (50): 7–14.
- 47 田代安定. 1877. 明治十年紀州紀行. [三重県史別編(自然)1996, pp.227–240]
- 48 富田靖男. 1990. 故郷の動物. 三重県良書出版会, 津, 253pp.
- 49 富田靖男・富田傑. 2004. 哺乳動物相. 上野市史自然編, pp.468–515. 上野市, 上野.
- 50 吉田英可. 2023. スナメリ 日本周辺. 令和4年度国際漁業資源の現況56. 水産庁水産研究・教育機構. [https://kokushi.fra.go.jp/R04/R04\\_56\\_PFI.pdf](https://kokushi.fra.go.jp/R04/R04_56_PFI.pdf). (2024年5月1日参照).
- 51 吉田英可・古田正美. 2014. 特集・日本のスナメリ研究最前線①. 海洋と生物, 36: 3–71.
- 52 吉田英可・古田正美. 2014. 特集・日本のスナメリ研究最前線②. 海洋と生物, 36: 135–201.
- 53 Yoshida, H., K. Shirakihara, M. Shirakihara and A. Takemura. 1995. Geographic variation in the skull morphology of the finless porpoise *Neophocaena phocaenoides* in Japanese waters. Fisheries Science, 61: 555–558.
- 54 Yoshida, H., M. Yoshioka, S. Chow and M. Shirakihara. 2001. Population structure of finless porpoises (*Neophocaena phocaenoides*) in coastal waters of Japan based on mitochondrial DNA sequences. Journal of Mammalogy, 82: 123–130.
- 55 吉岡基. 2002. 伊勢湾・三河湾調査. 自然環境保全基礎調査 海域自然環境保全基礎調査 海棲動物調査(スナメリ生息調査)報告書, pp.53–90. 環境省自然環境局 生物多様性センター, 富士吉田.